

セミナー；鈴木貞美「日本の『文学』概念再び—日本文芸史の再編に向けて」

6/8/14:00 - 16:00 神保町・読書人隣り

近代以前、「文学」は漢詩文を意味し、和歌も物語も「文学」と呼ばれたことは一度もなかった。「日本文学」は、西洋近代の”literature”を借りて明治期につくられた新概念で、しかも、漢文を入れるか、どうか、宗教をふくむ日本的「人文学」か、感情表現主体の「美文学(純文学)」か、四つの選択肢の前で逡巡したまま、今日でも覚束ない。

さらには「歴史物語」「軍記物語」「日記文学」「説話文学」「随筆文学」など次つぎに新しい下位概念がつくられ、西洋近代が生んだ「私小説」が日本の古代からの伝統とされたり、表現形態のちがう『枕草子』『方丈記』『徒然草』が「日本の三大随筆」と横並びにされたり、混乱の極みに置かれたまま1世紀近く経とうとしている。

近代以前から日本語に、少なくとも、漢文書き下し体、和文体、和漢混交文体、口語体の四つの様式を流通させてきたこと自体、国際的に稀な事態で、その中で育まれてきた諸ジャンルとの関係を改めて問いなおすことから日本文芸史の再編ははじまる。